

底冷えの朝に弁当つくるとき
ご飯や鍋からぬくさをもらって

加藤 美紀（愛知県）

みにとまと
つるんと湯むきするたびに
なにかを許していく夕方

高橋ちひろ（宮城県）

加藤さんの作品、「ぬくさ」という言葉がいいなと思いました。「あたたかさ」よりも肌に直接伝わってくるものを感じます。また、自分が炊いて火にかけてのものから「ぬくさをもら」という慎ましい心のありようが印象に残りました。

高橋さんの作品は、ひらがなで書かれた「みにとまと」が、湯むきでやわらかくなったトマトと語り手両方の輪郭を伝えてきます。

どちらの作品にもぬくもりのある時間が描かれていて、読み手の心もじんわりぬくくやわらかくなってゆきます。

六十年前の詩集の紙の香を
嗅ぎながら螺旋階段のぼる

まちりこ（埼玉県）

手に取り、ゆっくりと時間をさかのぼり、螺旋を描きながら、本のなかの世界へ入ってゆく。幸せな読書のひととき。

好きなままで嫌いになった

ハンカチの
綺麗な刺繍の傷跡みたい

まちりこ（埼玉県）

この矛盾する心理には覚えがあります。ハンカチは時に別れの象徴でもありますね。どんなに「綺麗な刺繍」でも、そこには必ず刺した針の穴が開く。思いがどのように変化するにしても「傷跡」は残される。

捨てられた傘が無数に積まれてる
放送禁止用語みたいに

まちりこ（埼玉県）

骨が曲がったり折れたり生地部分が破れていたり。あるいはどこも壊れていないにも関わらず「捨てられた」のかもしれない「無数」の傘の墓場。「放送禁止用語」の比喻に、人間に翻弄される言葉たちを思います。言葉を生かすも殺すも人間の使い方次第です。

おとうとの肩に
うっすら積もる雪をはらう
キッチンからはカレーの匂い

まちりこ（埼玉県）

平安な日常のひとコマが慈しみを帯びて切り取られています。なにげない日々の儚さと尊さ。

曖昧な関係だった僕たちの
餃子が同じ皿で出てくる

燦嗣いとり（愛知県）

「同じ皿」に盛られた餃子によって、自覚させられる「僕たち」の「曖昧な関係」。餃子の皿ひとつでも、かすかな心の動きを書き表すことができるのですね。

まだ嘘もほんともなくて
おひるねの
園児へ割れるフウセンカズラ

さいう（愛知県）

「園児」への「まだ嘘もほんともな」という定義づけに感じ入りました。その「嘘もほんともな」といような子どもたちにも世界は確かに影響を及ぼしている、それも彼らのあずかり知らぬところで、という事実にとどきりとさせられます。

噛み尽くすガムから
雨の味がして
吐いたまんまのかたちでひかる

さいう（愛知県）

「嘔み尽くすガム」から「雨の味」がするという新鮮さ。「吐いた」ガムにさえ光は宿る。前述の「まだ嘘もほんともなくて～」もそうですし、同じ作者による「希望っていう字を／なぞるたびに／ある／若葉みたいにきらめく払い」「美術部のきみは／りんごの手触りを／世界でいちばんきれいに話す」「家族ぶん並べておいた／おむすびに／ぱちぱちひかる塩のけっしょう」「海をわたる／鳥はひかりの群れとなり／国のさかいを触れずにまたぐ」など、無垢なものへのあこがれのような、清浄なものを掴み取ろうとするかのような作品が、心に多く留まりました。

母を呼ぶ声で

仔犬が鳴いていて

ペットショップへうすぐらい風

さいう（愛知県）

ペットショップのにぎやかさではなく、残酷さに焦点が当てられています。真っ暗闇ではないけれど決して明るくはない「うすぐらい風」に人間のエゴの性質というものを突きつけられるような気がしました。

歌にして殺した空を飛んでいる

鳥がなかなか着陸しない

松下 誠一（東京都）

詩歌のなかでは、いくらでもどんなものでも殺すことができる。「鳥」の今も未来も書き手次第なようで、実は「鳥」次第なのかもしれない。創作における実感が述べられているように思いました。

なあんにも声を出さない

田園の風景がある そっと

もたれかかります

永井 貴志（京都府）

もしかしたら現実には失われてしまった風景かもしれませんが、「そっと／もたれかかります」と語り手を無防備にさせる「田園の風景」は、いつまでも静かなまま心の奥にあり続けるのでしょう。

さっきまであんなにきれい
だったのに枯れた花火を
バケツに生ける

猫谷圭希（広島県）

やり終えた花火を危なくないようにバケツの水に浸す。それだけの行為が書かれているわけですが、「バケツに生ける」という丁寧な手つきに、何かが終わった後の時間のあのなんとも言えないさみしい感じがしみじみと伝わってきます。

山下と話す田辺の声につく＃が
僕の失恋だった

猫谷圭希（広島県）

半音高くなる声音に「田辺」の「山下」への恋心を感じ取る「僕」。「失恋」という痛手を乗り越えるために、このユーモアは貴重です。同じ作者による「加湿機は狼煙をあげ続ける／部屋の隅で私に無視されながら」にも、現実には“ひとひねり”を加えようとする意欲が感じられました。

浜辺のごみが持ち主の元へ帰る
というファンタジーホラー小説

最上葉途（山口県）

ごみを捨てる人への抗議の気持ちをこんなふうにウィットを効かせて言い表せるのは素晴らしいことだと思います。

私というものを
誰よりもよろこんだ犬が
じきに死ぬ

小山桜子（東京都）

犬の存在によるこぶ「私」ではなく、犬の側の気持ちを確かに知っている「私」が描かれているところに、お互いのゆるぎない関係性が伺え、一層強く「私」の悲しみが伝わってきます。「じきに死ぬ」というストレートな表現にも胸を衝かれました。

たくましいってのは、
苦しさを抱えた魂の話さ。

野間一聖（滋賀県）

「たましい」に「く」の一字を加えたら「たくましい」。単純な言葉遊びのようでありながら、「苦しさを抱えた魂」は「たくましい」のかと励まされます。

冬晴の引っ張る力 腹が減る

山本先生（東京都）

澄み渡ってしんと冷えている「冬晴」の大きさに「腹が減る」一人の人間の命が釣り合っていて、生きる力が感じられる一篇です。

投稿数がさらに増え、ほかにも心動かされる作品がたくさんありました。
来月も楽しみにしています。